

人格形成を規定する要因分析 (II)

— 芸術専攻者の性格特性について —

A Study of Factors Effecting on Development of Personality (II)

— *Of the personality of those who are
making a special study of arts* —

高 橋 正 臣

I 研究目的

本研究は、人格形成を規定する要因分析に関し、特に芸術専攻者について、総合的にその人格を解明しようとする一連の研究の一部のうち、すでに報告した芸術専攻者(女子)に続く(1)、男子芸術専攻者の性格特性上の特有性に関し、

1. 全体的傾向、
2. 美術・音楽専攻領域別傾向、
3. 男子・女子芸術専攻者間の相違、

を明らかにすることを目的としている。

II 研究手続き

1 研究対象

昭和40年より47年に至る芸術短期大学入学の、芸術専攻男子学生、計73名(美術・音楽に関する一定規準以上の能力をもち、学習してきたと評価されて入学を許可され、半年間大学で専門の芸術教育を受けたもの)。美術専攻者は、絵画・デザインを学習の主体とし、音楽は、器楽・声学を学習の主体としている(表1参照)。

表1 専攻別研究対象

美術専攻者	音楽専攻者
54名	19名
計	73名

2 研究方法

研究対象に、矢田部一ギルフォード性格検査(Y-G

検査を実施)。実施の期間は、各年度とも、大学入学後半年から1年までの期間である。

III 研究結果と考察

Y-G検査によって測定される性格特性は、次の12である(2)。

Depression :

たびたびゆううつになる、理由もなく不安になることがあるなどの、陰気な、悲観的気分や、罪悪感の強さを示す特性。

Cyclic Tendency :

気が変りやすく、感情的で、物事に驚きやすい情緒不安定、気分変易性の強さを示す特性。

Inferiority Feelings :

劣等感に悩まされる、自信の欠乏などの自己の過小評価、不適応感の強さを示す特性。

Nervousness :

神経質で心配性、いらいらするなどの、ノイローゼ気味の強さを示す特性。

Lack of Objectivity :

ありそうもないことを空想する、ねつかれないなどの空想性、過敏性、主観性の強さを示す特性。

Lack of Cooperativeness :

不満が多い、人を信用しないなどの不満性と不信性の強さを示す特性。

Lack of Agreeableness :

気が短い、正しいと思うことは人にかまわず実行する、人の意見をききたがらないなど、攻撃的な強さを示

す特性。この特性は、情緒不安定特性 (D, C, I, N) と結合すると、社会的不適応をひきおこす。反面情緒安定と結合すると、社会的にも活躍する社会的活動性となる。

General Activity :

仕事が早い、動作がきびきびしているなどの肉体、精神面の両方にまたがる強さを示す特性。

Rhathymia :

人といっしょにはしゃぐ、何時も何か刺激を求めるなどの気軽な、のんきな、衝動的な強さを示す特性。

Thinking Extraversion :

これは深く物事を考えたり、たびたび考えこむくせがあるなどの、思索的、冥想的、反省的熟慮性傾向とは逆方向の、考えが大ざっぱでのんきな傾向の強さを示す特性である。

Ascendance :

会やグループのために働くなど、引込み思案でない、積極的な社会指導性、リーダーシップの強さを示す特性である。

Social Extraversion :

誰とでもよく話す、人と広くつきあうのが楽しみである、など社会的に对人接触を好む、对人的に外向的、社会的、社会的接触を好む強さを示す特性である。

1. 芸術専攻者 (男子) 特有の性格特性の存在について :

芸術専攻者特有の性格特性の存在については、既報⁽¹⁾の如く女子については認められたが、男子に関しても、表2、図1に示されるように、一般者と比較して、いくつかの性格特性について相違が認められる。

すなわち、芸術専攻者 (以下男子専攻者を示す) と対比するための比較群 (統制群) として、一般大学生 (男子4,136名) をとりあげ、その検査結果⁽³⁾を芸術専攻学生と比較対比した結果は次の通りである。

(1) 芸術専攻者群が、統制群と比べて有意な差を示す性格特性は、情緒安定に関しては、D (抑うつ制), C (回帰性), I (劣等感), N (神経質), O (主観性) の5特性であり、これは情緒安定に関する全性格特

性について芸術専攻群と、一般群との間に相違があることを示している。

社会適応性の面では、Ag (攻撃性), R (衝動性), S (社会的外向) の3特性に差異がみられる。

(2) 一般に性格構造の情緒領域においては、芸術専攻者は、一般の者に比べて陰気、悲観的、罪悪感が強く、気分の動揺や変動性が大きく、感情的であり、ありそうもないことを空想してねつかれないなどの主観的、過敏な傾向をもち、しかも心配性で神経質である。

特に悲観的で罪の意識に悩む抑うつ傾向と情緒の変動が一般の者に比べてかなり高いようであり、そうとうつとの回帰が激しいといえる。芸術専攻者群が抑うつ傾向を強く示すことは、Munsterberg, E. 研究結果⁽⁴⁾とも一致している。

なお、芸術専攻群は一般群に比べて、劣等感が強く、自己を過小評価し、自信欠乏的な傾向を示すのではないかと予想されたのであるが、結果はむしろ逆の傾向を示している。

(3) 社会適応性の領域面では、芸術専攻群と一般群との間においてAg, R, A, Sといった性格特性に相違が認められるが、その相違の内容は、従来の研究や⁽⁵⁾、常識的見地とはやや異なる、芸術専攻群の外向性への傾きを示している。特にS特性の得点が統制群よりかなり高いことは、对人的に社交性をもち、社会的接触を好む傾向を有しているといえる。Ag, R, A得点も統制群より有意差をもって高いことから、彼らが社会的活動性をもち、気がるで活発で社会的指導性をもつ反面、衝動的、のんきな傾向を示している。

(4) 芸術専攻者が一般者と比較して、芸術経験がさして長期にわたらない青年期の時代にすでに彼らの特有の性格特性をもつことが明らかとなったが、その特有性を検討した場合、従来の研究と比べて、情緒的領域の面では一致しているが、社会的適応性の面では逆に傾く結果が示されている。

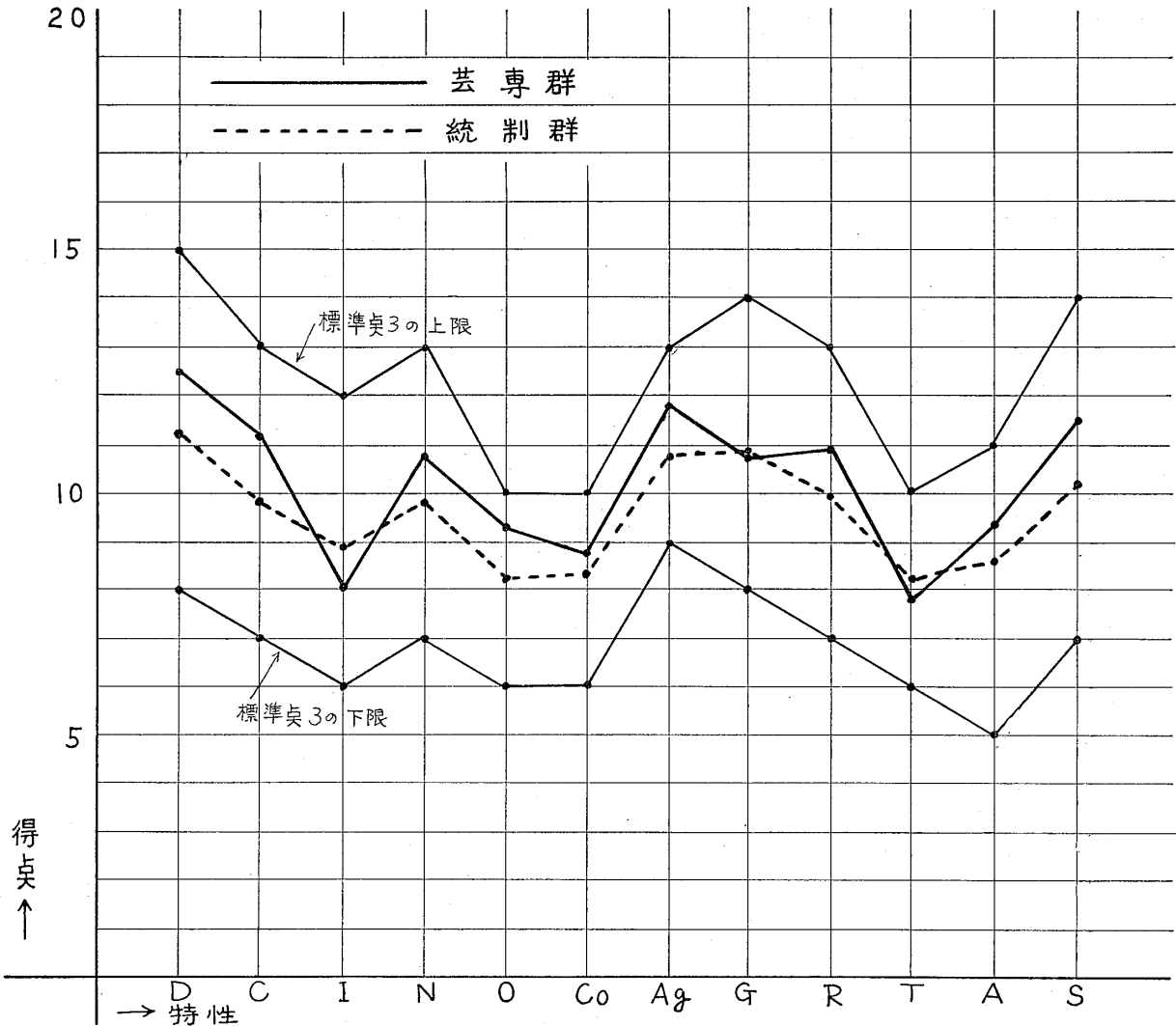
このような結果は一体どのような要因に基づいて発生したのであろうか。推測されるのは、このような性格特性は最近の学生全般にみられるものであり、統制群の資料 (1965年) と時代的な差があるために生じたのではな

表2 (男子) 芸術専攻者と一般者の比較 数字はY-G検査の得点

グループ別	性格特性	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
芸術専攻群		12.47	11.22	7.92	10.79	9.34	8.79	11.77	10.70	10.90	7.79	9.41	11.52
統制群		11.23	9.98	8.97	9.72	8.11	8.34	10.87	10.85	9.96	8.16	8.52	10.23

***P<0.001 **P<0.01 *P<0.05

図1 (男子) 芸術専攻者と一般者の比較



いかということである。これを明らかにするには、1965年(昭和40年)時から1972年(昭和47年)に至る検査結果の逐年的検討が必要であるが、研究対象数が少いためこれは不可能であった(女子芸術専攻者については、逐年的研究の結果、年度間に有意な差は認められていない(6))。

2. 美術専攻者(男子)と音楽専攻者(男子)との間に、性格特性上の差異が認められるか:

(1) 表3, 図2が示すように、美術専攻者群と音楽

専攻者群との間には、かなり大きな差異が認められる。

すなわち、情緒領域面では、C(回帰性)特性においては美術群が、I(劣等感)特性においては音楽群がそれぞれやや高い得点を示しており、他の情緒特性については、ほとんど差が認められない。

これに対し、社会的適応性の面については、T(思考的外向)において音楽専攻群が美術専攻群より得点が上回っているのみで、他の全特性について美術専攻群が、音楽専攻群より高い得点を示している。特にAg, R, Sにおいて激しい差を示している。

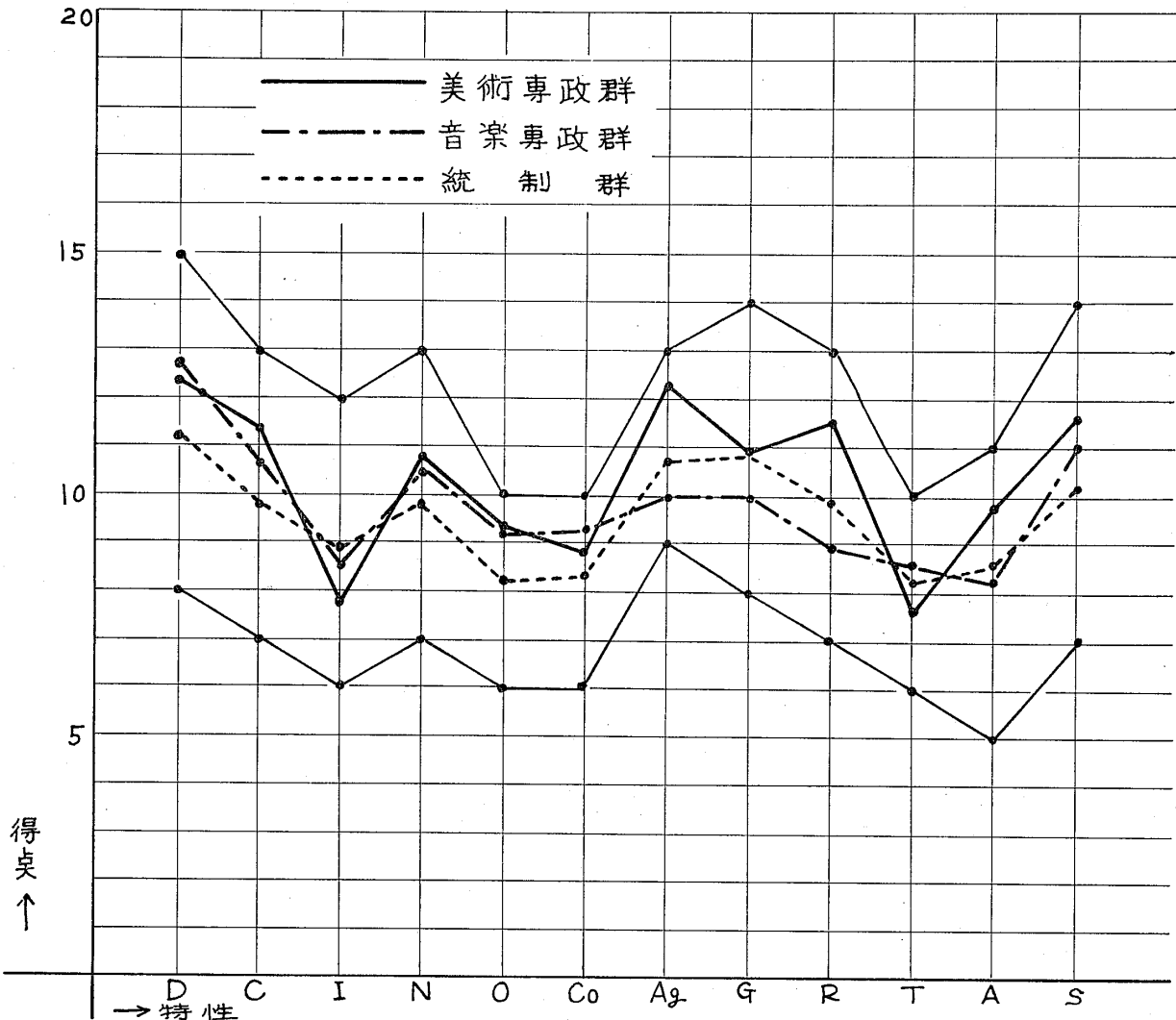
表3 (男子) 専攻領域別・性格特性得点

グループ別	性格特性	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
美術専攻群		12.35	11.43	7.69	10.83	9.37	8.85	12.39	10.96	11.57	7.48	9.87	11.70
音楽専攻群		12.79	10.63	8.58	10.68	9.26	9.16	10.00	9.95	9.00	8.68	8.11	11.00
統制群		11.23	9.98	8.97	9.72	8.11	8.34	10.87	10.85	9.96	8.16	8.52	10.23

***P<0.001 **P<0.01 *P<0.05 *** * *** * **

図2

(男子) 専攻領域別・特性得点



(2) 美術専攻者は音楽専攻者に比べて、情緒的領域面では、感情の変異性が大きく、気分の変化が大であるが、自己を過小評価して劣等感に悩むということは少ない。しかし社会的適応領域の面では、美術専攻者は音楽専攻者に比べて、特に気が短く、人の意見をききたがらず、正しいと思うことは人にかまわず実行し、常に何かの刺激を求め、気がるで衝動的な面が強く、人とはしゃいだり、かなりの指導性(リーダーシップ)も発揮し、対人接触を好み、じっとしているより、精神的にも肉体的にも活動的な傾向を示している。ただし一面、冥想的、熟慮的な面もちあわせている。

美術専攻群と音楽専攻群の両者間の性格特性上にこのように大きな相違(特に社会的領域面での Ag 攻撃性, R 衝動性)が生じるのか, Roe, A. や Munst-erberg, F. が芸術専攻者の行動特性として、攻撃性の弱いことをあげている(7)こととあいまって、今後の大きな研究課題として残された問題である。

3. 男子芸術専攻群と女子芸術専攻群との両者間に性格特性上の差異が認められるか:

男子, 女子両者間に性差そのものによる性格上の相違は当然認められ, それを示すのが男女統制群の性格特性得点である。

従って芸術専攻群としての男女間にどのような相違が認められるかということは, この統制群の得点を標準得点として, この得点から, 男女芸術専攻群の得点がどれほどの有意な偏差をみせるかの差異によって決定される。

(1) 男・女芸術専攻群の, 統制群との間の性格特性得点の偏差及び有意差のある特性は表4, 表5に示され, これを図示したのが図3, 図4である。

一般的傾向として, 女子芸術専攻群(以下女子群)は, 社会的適応領域において統制群と有意な差のある特性が多く(G, R, T, A, S特性), 男子芸術専攻群(以下男子群)は, 情緒的領域において統制群との有意な差のある特性が多い(D, C, I, N, O特性)。

人格形成を実現する要因分析 (II)

表4

(女子) 芸術専攻者と一般者の比較

数字はY-G検査の得点

グループ別	性格特性	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
芸術専攻群		11.29	11.15	8.83	9.82	9.15	6.85	10.84	11.27	11.03	8.82	9.13	11.65
統制群		11.73	10.33	9.00	9.76	8.36	6.88	10.45	10.70	9.10	8.08	8.42	10.40
			***			**			*	***	***	**	***
		***P<0.001	**P<0.01	*P<0.05									

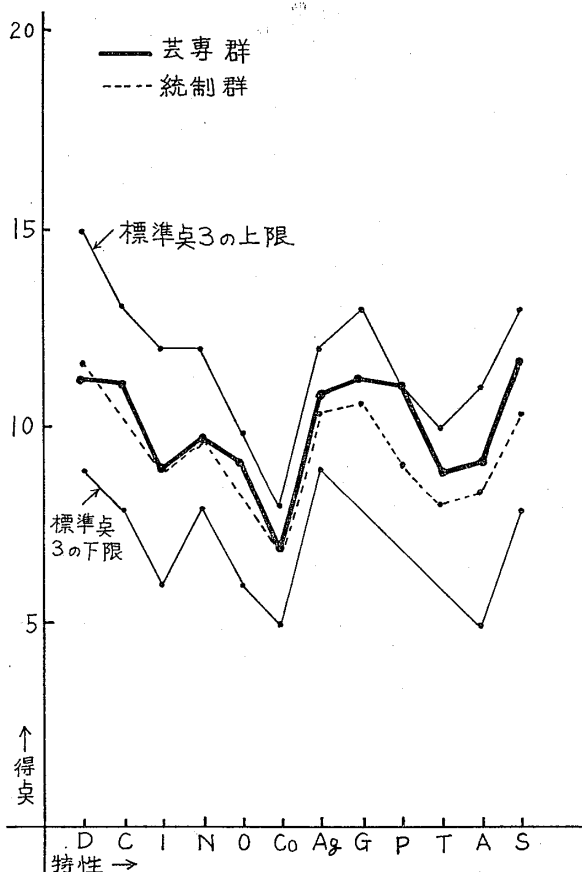
表5

(男子) 芸術専攻者と一般者の比較

数字はY-G検査の得点

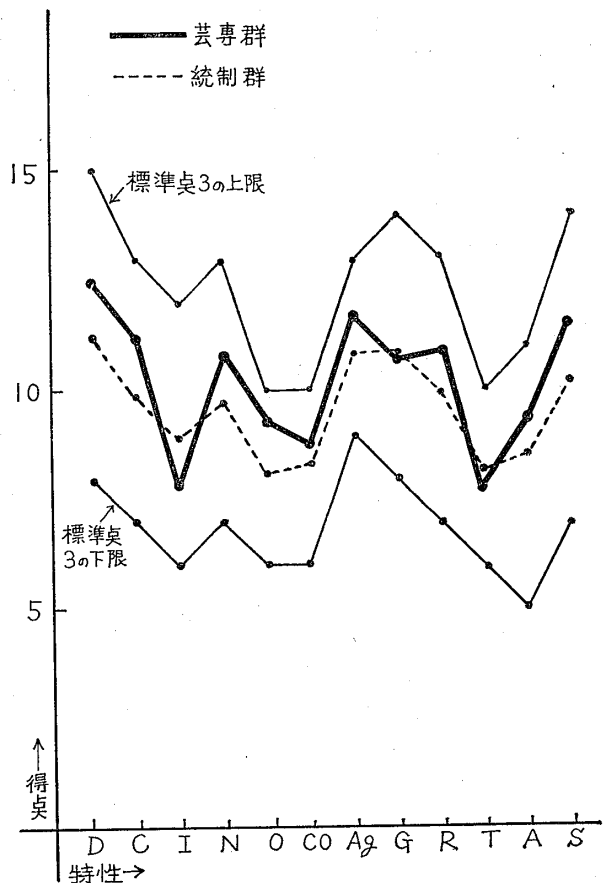
グループ別	性格特性	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
芸術専攻群		12.47	11.22	7.92	10.79	9.34	8.79	11.77	10.70	10.90	7.79	9.41	11.52
統制群		11.23	9.98	8.97	9.72	8.11	8.34	10.87	10.85	9.96	8.16	8.52	10.23
			***	**	**	**		*		*			***
		***P<0.001	**P<0.01	*P<0.05									

図3 (女子) 芸術専攻者と一般者の比較



これは男子芸術専攻者は女子芸術専攻者に比べて、情緒的に、かなり不安定な特質を有していることを示すものと思われる。ただ男子群の場合は、自信が強く、劣等感に悩むものは少ないようである。また女子群は、活動的、衝動的、対人接触を好み、非熟慮的な、冥想的傾向の少ない外向型タイプの社会的適応特性を示している

図4 (男子) 芸術専攻者と一般者の比較



みられる。

なお、男子・女子群ともに共通して高い得点を示す性格特性はC(回帰性)、O(客観性)、R(衝動性)、S(社会的外向)であり、この4性格特性が芸術専攻者の典型的な性格特性とみなされるようである。

すなわち、気分の動揺や変易性の大きく、そうとう

の回帰性が強く、ありそうもないことを空想してねつかれない主観的、過敏な傾向をもち、気がるでのんきではあるが衝動性が強く、対人的に社交性をもち、社会的接触を好む性格を代表すると思われる。

(2) 美術専攻群と音楽専攻群との間の性格特性上の差が、男子・女子によってどのように異なるか。

美術専攻群と音楽専攻群との間の性格上の差は、男子と女子とではかなり大きな相違を示している(表6・表7, 図5・図6参照)。

情緒面においては、I(劣等感)特性について、男女とも美術専攻群が音楽専攻群より有意に得点が低く、C(回帰性)特性については、男子美術群が音楽群より得

表6 (女子) 専攻領域別・特性得点

グループ別	性格特性	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
美術群		11.36	11.00	8.63	9.80	9.16	6.85	11.05	11.19	11.25	8.91	9.06	11.71
音楽群		11.14	11.46	9.24	9.86	9.12	6.86	10.40	11.43	10.56	8.63	9.28	11.52
統制群		11.73	10.33	9.00	9.76	8.36	6.88	10.45	10.70	9.10	8.08	8.42	10.40

***P<0.01 **P<0.05

※ ※※

表7 (男子) 専攻領域別・性格特性得点

グループ別	性格特性	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
美術専攻群		12.35	11.43	7.69	10.83	9.37	8.85	12.39	10.96	11.57	7.48	9.87	11.70
音楽専攻群		12.79	10.63	8.58	10.68	9.26	9.16	10.00	9.95	9.00	8.68	8.11	11.00
統制群		11.23	9.98	8.97	9.72	8.11	8.34	10.87	10.85	9.96	8.16	8.52	10.23

***P<0.001 **P<0.01 *P<0.05

*** * *** * *** * **

図5 (女子) 専攻領域別・特性得点

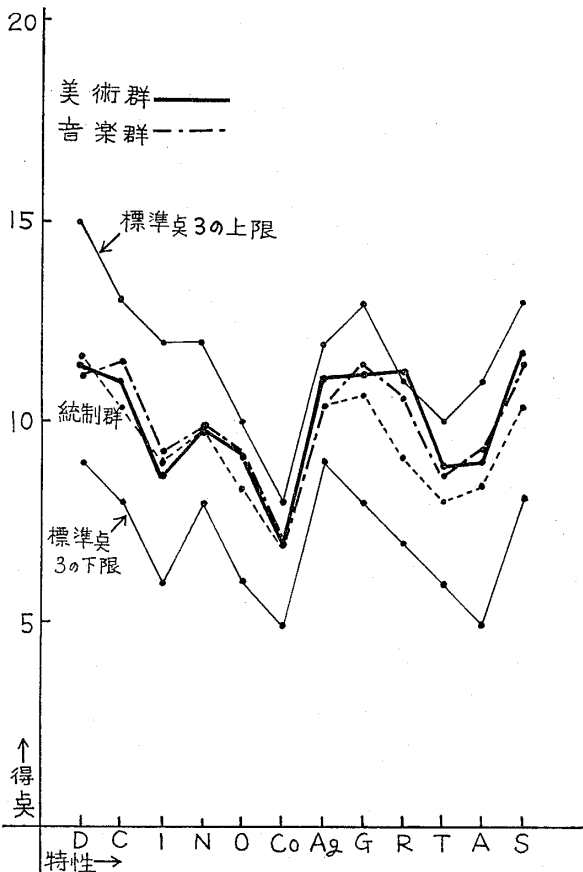
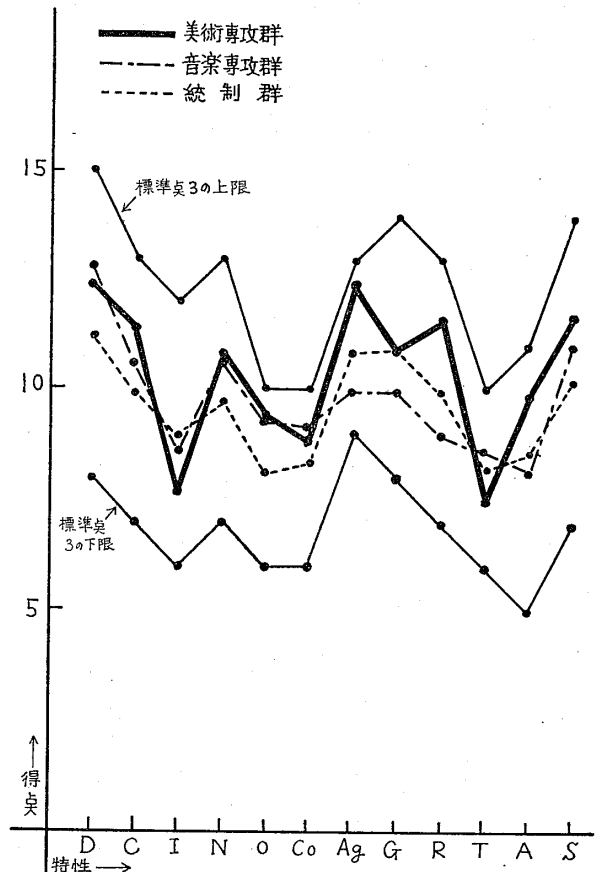


図6 (男子) 専攻領域別・特性得点



点がやや上回っている。この2点を除いては情緒面は、男・女間においてほとんど差異が認められない。

これに対し、社会的適応面では、男・女間に大きな相違が認められる。

図5、図6で一見して明らかなように、女子群においては、音楽・美術両群間の有意差を示す特性は、Ag(攻撃性)、R(衝動性)特性のみであるが、男子群においては、音楽・美術両群の有意差を示す特性は、S特性を除く全特性、Ag、G、R、T、特性となっており、しかも、Ag、R特性については、男子群においては、美・音間の差が圧倒的に大きくなっている。

すなわち、女子群においては、美術専攻者が音楽専攻者に比べて、やや攻撃的、衝動的であるのに対し、男子群においては、美術専攻者は音楽専攻者に比べて、かなり攻撃的、衝動的であり、集団活動における指導性や活動性に富んでいる。

美術専攻と音楽専攻によって、性格特性上の相違が認められるであろうことは既に予想し、その仮説の検証も行なわれたのであるが(8)、その相違が男女間においてこれほど大きな開きがあることは想像外であった。美術を専攻し、音楽を専攻することが、性格特性を形成する規定要因として働く場合、その規定度が男女によって何故にこのように大きな相違を発生せしめるのであろうか。

これは、女子の場合、芸術専攻という環境要因からうける性格形成上の規定される度合いが男子に比べてかなり少ないためであろうか。

あるいは、男子においては、そもそも美術専攻者と音楽専攻者は、当初より性格特性の異ったものが、各々の専攻領域に属しているのであろうか。

これらの問題は、今後の課題として残されている。

IV 要 約

本研究は芸術専攻者の性格特性に関する研究の第2報告である。

すなわち、芸術専攻者(男子)の性格特性上の特有性について、

- (1) その存在性、
- (2) 専攻領域の相違による差異、
- (3) 芸術専攻者の男女間における差異、

の仮説を設定し、これを検証した。

結果としては、(1)については、情緒面において特に特有性が認められ、(2)については、社会的適応面において著しい相違が存在し、(3)についても(2)と同様に、社会的適応面における相違が顕著であり、しかも、その度合いは予想を大きく上回るものであり、今後の研究課題として残されている。

[註]

- (1) 高橋正臣：人格形成を規定する要因分析(1)、大分県立芸術短期大学研究紀要 第9巻 1971.
- (2) 辻岡美延：新性格検査法、1965.
- (3) (2)に同じ
- (4) Munsterberg, E & Mussen, P.H.:
The personality structures of art students.
J. Person., 21, 1953.
- (5) (4)に同じ
- (6) (1)に同じ
- (7) (4)に同じ
- (8) (1)に同じ